

花よりダンゴ

午後5時。仕事をしながら嫌な雰囲気になってきた。辺りの視界がほとんどないのである。せいぜい30メートルだろうか。前の車のテールランプすら見えにくい状況になっていて、車の運転をするのも危険な状況である。いくら海が近いとはいえ、こんなに霧が立ち込めるのはたいへん珍しい。会社へ戻るのも一苦労だ。

普段ならこれで本日の営みは終わるのだけど、今日の場合はそうはいかない。これから半年以上ぶりに旅に出るその夕方だからだ。行程は今晚3月26日（平成11年）に出発して、28日までの計3日間で、今回も目黒君に同行をお願いする。交通手段は例によってJRである。

しかし、どの交通手段を選ぶにしても、この霧は四国在住の私にとって行く手を阻む分厚い壁のような存在だ。あまりに心配なので、高松駅に問い合わせに向かう。

「瀬戸大橋線は大丈夫ですか？」

「はい」

「遅れてはいませんか？」

「今のところ遅れはありません」

どうも、そっけない対応で素直に聞くことができない。同じ質問を何度も受けてきたから「またか」と思われたのだろうか。ただ、「今のところ」というフレーズが気に掛かる。でも、得られる情報はこれだけだから、不満でも駅を後にするしかない。気分までどんよりしてきた。

仕事が終わって会社を出たのは、久しぶりに遅くなって20時を過ぎている。さっき、あれほど気にしていた霧はいつの間にか晴れている。夕方の焦っていた自分がおかしくなって、車の中で一人苦笑する。

今回の行き先は九州で、乗るのは岡山を0時半頃に出る夜行快速「ムーンライト九州」である。いつもなら「銀河」だの「きたぐに」だの徳山方面の最終の「ひかり」だのと、バタバタするところだけど、今回は高松を23時過ぎに出る最終の「マリンライナー」に乗ればいいので、慌てなくても十分間に合うのだ。

今度のように旅に出る時間が遅いのは非常に喜ばしい。もちろん、与えられている限られた時間の中で、それに占める「旅」の時間が長ければそれに越したことはない。でも、家に帰ってから風呂に入ることができるし、食事もできる。まだ余裕があれば持ち物のチェックだってできる。何よりほっと一息つけるのがいい。そして、
「では、行ってくる」

と、おもむろに旅に出られるなど、なかなか味わいがあっていいと思う。

風呂に入って、妻にご飯を作ってもらい、テレビを見ながら食べ終える22時過ぎである。妻には悪いけど、高松駅まで送ってもらう。しかし、妻もまんざらでもなさそうである。私がいないうち、実家に帰れるとあってか、嬉しそうだ。亭主の面倒を見なくても済むし、実家だとゆっくり羽も伸ばせるから当然であろう。

この時間の高松駅はさすがに人影もまばらで、家路を急ぐサラリーマンの他には私のように「ムーンライト九州」に乗ると思われる旅行者風の人たちがわずかにいるくらいだ。

23時05分に高松発最終の「マリンライナー 68号」岡山行きが発車する。最終の岡山行き

だから、高松近郊の終列車の役割も兼ねていて、ほぼ各駅に停まっていく。

こんな深夜に発車しても、その列車の終着が翌朝になるもの、つまり夜行列車を除いてはすべて昼行列車扱いとなる。山手線が深夜の1時過ぎまで走っても夜行列車とは言わないのと同じように、この「マリンライナー68号」も昼行列車なのだ。でも、雰囲気そのものは夜行列車で、話し声などほとんど聞こえないし、しんとした車内から街灯やネオンが点々とする沿線風景を見ていると自然と眠たくなってしまふ。まもなく高架に入って、坂出に到着したけど、乗客は少し入れ替わっただけで、この後も大して増えはしないだろう。

瀬戸大橋を渡る手前の番ノ州工場群、橋の上から見るフェリーや漁船の照らす灯りは「マリンライナー」の一番の見どころで、昼の島々の並ぶ光景もいいけど、夜のこの情景もまた、私が愛してやまない風景だ。

本州側に入って児島からの区間はトンネルあり、田園風景ありと寂しい車窓となる。それでも、児島から30分くらいで岡山の手前の大元まで来ると、辺りが急に明るくなって、沈滞していた車内も生氣を取り戻したように活気付いてくる。

0時16分、岡山着。気が付かなかったけど、案外乗っていたものだ。昼間の半分の3両編成だからそう感じたのかもしれない。6両で走らせるほどでもないから、これでちょうどいい。

これから乗る「ムーンライト九州」の出る7番線には私を含めて結構な人数が足を運んでいる。そして、ホームには既に数十人が待っており、

自由席の札のかかったところには、それぞれ10人以上の列ができています。やはり春休みということで、「青春18」族が多いのだろう。かくいう私も今回は「青春18きっぷ」での旅だ。

そもそもこの「ムーンライト九州」は「青春18きっぷ」に合わせたかのように、春、夏、冬休みを中心に運転される臨時列車で、定期の九州行きのブルートレインが寝台車中心なのに対して、「ムーンライト九州」は自由席主体の座席車だけの編成で、しかも快速だから、自由席利用なら運賃以外の料金も払わずに済み、速度もブルートレインと大差ないとあって、学生を中心に根強い人気がある。この列車を「青春18きっぷ」で利用すれば、1日あたり2,300円で乗り放題だから、夜行ということで2日分またがってもわずか4,600円で九州まで行くことができる。ブルートレインなら、B寝台の寝台料金だけで、6,300円もかかるから、それに運賃や特急料金も含めると、両者の間には相当な差が生じる。だからこそ、この人気なのである。

その「ムーンライト九州」に乗るのは、大学4年の夏に所属していた写真部の撮影旅行で九州に行ったとき以来、2回目だ。もうあれから6年近くの歳月が流れた。いつものことだが、何年ぶりにまた同じ列車に乗ったり、同じところへ行くと、月日が経つのはなんと早いことかと思ってしまう。とくに、社会人になってからはこの思いはいつそう強くなっている。歳をとったということなのか。

おそらく、目黒君はホームのどこかで私の到着を待っているはずである。彼は最終の「のぞみ31号」で東京を発ったから、私より20分程前に岡山に着いている。

ホームを見渡してみると、遠くに目黒君がいるのが見える。そちらに向かうと、彼のほうも私を見つけ、

「久しぶりやの」

「遠路はるばるご苦労さん。それにしても『のぞみ』は退屈やったやろ」

「そやの。寝よった」

「目黒君らしいわ」

久しぶりの再会といっても挨拶はこの程度である。ここで、目黒君に頼んであった指定席券をもらう。しばらくすると、姫路方面から光が射ってきて、「ムーンライト九州」が7番線に入線してきた。0時23分着。

既に大勢の乗客を運んできています。そのうえ、この岡山からも私たちを含めてかなりの人数が乗ってくるので、自由席の人には気の毒だけど、通路かデッキで夜を明かしてもらうしかなさそうである。これは私にも経験があり、たまったものではない。体はあちこち痛いし、眠れない。眠れないから翌日は眠たくて、車窓風景どころではなく、正に踏んだり蹴ったりで、こういう人気列車であるほど、覚悟して乗らなくてはならないと思ったものである。

ビールを買って指定席の車内に入る。こちらは自由席の車両ほど騒然とはしておらず、シートに身を沈める。すると、もう0時28分、発車の時刻になっていた。

ここから先は5時05分着の山口県の厚狭まで客扱いの停車はない。福山、広島、岩国、徳山、小郡といったところですら通過するのだ。つまりこの先、洒落ではないのだろうが、朝が来るまで乗客の入れ替わりはない訳で、安眠が確保できるということだ。非常にありがたい。翌日にしっかり車窓風景を見るためには、夜行列車ではちゃんと睡眠をとっておかないと、せっかく時間節約のために利用している夜行列車が無意味なものになってしまう。

久しぶりに目黒君と会い、乾杯を済ませると、真っ先に出る話題は野球である。折しも、プロ野球公式戦の開幕前でもあり、当然今年はどうなるかという話になる。また、終わったばかりの大相撲の話題も触れる。ひと通り、スポーツ談義を終えたら、もう糸崎である。

「おい、もう糸崎やぞ」

「えらい早いな」

目黒君はなぜ用意しているのか、電卓を出して、およその速度を計算し始める。

「70キロ超えとる」

「特急と変わらん」

糸崎は山陽本線や呉線の三原発着の列車を留置するための側線を多く持っている。大きな芋虫のような列車がパンタグラフを降ろして、しばしの休息をとっている。ここでしばらく停車。

「運転手の交代かいの？」

「さっき岡山でしたやろ」

「まあ、ええわ。どこで交替しても」

客扱いをしないのに、蒸気機関車時代からありそうな大きな造りの洗面所には蛍光灯が明々と灯っていて、なんとなく寂しい。

糸崎を出て、尾道、三原と過ぎ、またまた快走する。

「おい、実のは。今日こうやって君とは旅に出れんかったかもしれんや」

「なんで？」

「夕方、こっちはすごい霧での。これが晴れんかったら、『マリン』はもちろん、船でも渡れんかったけんの」

「ふーん。それは危ないところやったの」

「まあ、それでもこうやって来れたけん、よかったけど、没やったら俺にとっては辛かった」

「久しぶりなんやろ？」

「そうやの。こうやって行くんは去年の夏以来や」

と、話していくうちに眠たくなってきて、いつの間にかまどろんでしまった。

あとは広島でやけにホームが明るくて目が覚めた以外はほとんど覚えていない。気が付くと下関辺りを走っていた。

「あー、E F 65やDD 51や。客車も並んだ。こういうん見たら、九州来たなって思うわ」

5時34分、下関着。ここで機関車の付け替えのため、12分の小休止。既に外は明るい。車外へ出て、体を伸ばす人、ジュースを買う人、機関車の付け替え風景をカメラに収める人、降りていく人、それぞれ思い思いにこの時間を過ごしている。

時間が来ていよいよ発車。門司、小倉と連続停車して少しずつ乗客を降ろしていく。もうラストスパートだ。

折尾辺りまでは北九州工業地帯で、昨夜の番ノ州など比較にならないくらいの大工場が所狭しと並んでいる。その中であって戸畑駅近くのスペースワールドは工場群に埋もれるどころか、存在感に溢れている。

折尾を過ぎ、遠賀川を渡るとしばらく鄙びた田園風景が続く。ここで一気に博多を目指す。沿線にあまり見るものもない。

7時27分、約7時間で博多に着いた。乗客の半分以上は博多まで乗り通していたようである。

「みんなが降りるまで待とうか」

「慌てることもないし」

今回の旅は目黒君主催で博多やその近辺のラーメン屋巡りをするのが目的である。しかし、どのラーメン屋へ行くとは決めていない。また、私は私でラーメンのつなぎで、しばらく乗っていないローカル線巡りを提案していたけど、これもどの線に乗るなど考えずに博多まで来たから、この時点では全くの白紙状態なのである。もっとも、2人とも腹案は持っていたけど、何も決めているわけではないので、気が楽だ。

大体乗客が降りた頃、私たちも準備をしようと網棚に手をかけると目黒君が、

「財布が落ちとる」

「え、ホンマや。届けないかん」

見ると、青い2つ折りのマジックテープで止めるもので、これは若者の財布のようだ。さっそく届ける。外へ出たほうが動きやすいし、車掌も見つけやすかろうと、まず外へ出た。

「車掌は後ろやろ」

と、後ろのほうへ向かうと、車内を前のほうへ歩いている車掌の姿が見えた。

「おいおい、前行くな」

勝手なことを言いながら、再び車内に入って車掌の元へ行く。すると、逆方向から大学生らしい女の子も車掌のほうへ歩み寄ってきている。

「あの一、すいません。○号車の××番の者ですけど、後ろの席の人が財布を落としていましたので、よろしく願います」

「分かりました。お預かりします」

女の子はこの財布を見るなり、

「あ、これ私のです」

うまい具合に現れるものだと思いながら、私たちは車掌が本人であることを確認しているのを見ていた。確認が終わると、女の子は自分の財布が戻ってたいへん安堵した様子で、「ありがとうございました」

と、2度3度お礼を言って降りていった。

「あの子も危ないところやったの」

「まあでも、よかったが」
なんだか気分がよくなってきた。

さて、博多へ来るのもずいぶん久しぶりで、3年半ぶりのことだ。駅の構造は何ら変わっていないので、迷うことはない。これから目黒君とラーメンを食べに行く。

こんな朝早くからラーメンなどと、そんな店があるのかとお思いの人もあるだろう。私も最初は「え？」と我が耳を疑った。でも、事実そういう店があるのだ。

ところが、いつも私が摂る朝ご飯は、ご飯一膳に海苔か、たくあんか、梅干か、それに類したもの何か一品付ければ十分で、胃のほうもそれくらいの量しか受け付けない。一方、九州といえば、こってりした豚骨ラーメンが主流である。大丈夫かと思ったけど、そこはよくしたもので、旅に出れば、いつもの生活環境、生活習慣などはあまり関係なく、なぜかなんでも食べられるのだ。今も私の胃袋は既にラーメンを待ちわびている状態になっている。なんとも都合のいい話だ。

外に出ると、小雨がぱらついている。折り畳み傘は持ってきているけど、一度使うと、そのあとの扱いに困るから、あまり使いたくはない。駅に戻るまでは雨にはなるべくこの程度で留まってもらってほしい。



博多駅の東口から北東方向に歩いて15分
から20分のところに、「一蘭」^{いちらん}という店がある。ここはなんと24時間営業のラーメン屋なのである。

それにしても、24時間営業とは聞いたことがない。それだけラーメンの需要が多いのだろう。昼食、夕食、夜食、飲みに行った帰り道、夜通し遊んだ夜明け前などなど、たしかにラーメンを食べたくなる時間帯というのはある。でも、いくらうどんで有名な我が香川県でも24時間営業という店はない。さぬきうどんだと、朝から夕方まで営

業しているのと、夕方から朝まで営業しているのがあり、合わせて24時間営業といった具合である。

正面から店の造りを見る。これは正にうまいものを食べさせてくれる店構えだ。大体、さぬきうどんもそうだが、小奇麗にしている店はあまり期待できない。美味しい店もあるけど、大抵はうまくもなく、まずくもない差し障りのない味にまとまっている。それに対して、あばら屋然とした、スーツなどでは入りたくないなと思うような店、と言えば語弊があるけど、そういう店はまず間違いなく美味しい。この「一蘭」もそういう店だ。

店内に入る。中央に厨房があって、カウンターで囲んである。座った目の前に注文用紙があり、麺の固さ、スープの加減など好みを選べるようになっている。私は初めてなので標準と思われるものを頼んだ。

店の雰囲気味わっているとラーメンが厨房から、にゅーっと現れた。厨房と客席は暖簾で仕切られていて、店員の顔は見えない。そんな厨房から丼を持つ手だけが出てきたので、少し気味が悪かった。ちなみに客席も一人ずつ仕切られていて、半個室のようになっている。ラーメンをじっくり味わってもらおうということなのだろう。

麺は普通にしていたけど、これでも十分腰があり、歯ごたえがある。また、スープも九州特有の豚骨をしっかりと煮込んでだしを取ったものなので、深みがあって、それでいて後

味がさっぱりしている。九州のラーメンは細いのに、腰が強く、どっしりとしており、重厚な豚骨スープによくマッチしている。

これはさすが本場の味だ。間違いなくトップクラスに名を連ねる店だ。こういう店を探すのは、なかなか難しい。

満足して再び博多駅に戻る。これからの行程について話し合う。

「とりあえずの、どこかローカル線乗りたいの」

「そやの。それでもこの近辺やの」

「うーん、筑豊か、日田彦山か、久大か、豊肥線辺りかの」

時刻表をいろいろ繰ってみると、久大本線のページに、臨時の快速「日田おひなまつり号」という名前の列車があり、今日はちょうど運行される日にあたっている。

「おい、これええやん」

「でも、門司には3時くらいに着いてほしい」

もう一軒、予定してあるラーメン屋は門司にある。

よあけ

「これで夜明から日田彦山乗ったら、小倉に出られる。それで門司寄って下松行ったらええが」

目的を達成すれば、今回またしても黙って下松の楠君宅に押しかける予定である。

「ディーゼルか。久しぶりにええかもの」

「よし、決定」

結局、博多を10時10分に出る臨時快速「日田おひなまつり号」で、久留米から久大本線に入って、列車の本来の目的である日田の「おひなまつり」を見ることなく、手前の11時43分着の夜明で降りる。次に乗るのは夜明を12時05分に出る日田始発の城野行き普通列車で、日豊本線に出て、小倉行き、門司港行きと乗り継いで14時22分に門司に着くという行程に決まった。こうやって見てみると、意外と早く回れるものだった。

でも、あまりに接続がよすぎるので、土産を買う暇がない。そこで、博多駅である程度の土産を買っておいて、それから列車に乗ろうと思う。このあと買えるところがあればいいけど、どうなるかは分からない。

博多駅の土産物売り場を見ていると、博多駅の駅弁をはじめ、福岡名産の菓子や辛子明太などが置かれてある。せっかく九州へ来たわけだから、こういった名産を買い求める。その一角に何の変哲もない、でも、串に3個しかない、みたらし団子が売られている。そのバックにはある子供番組で放映されている歌が流れている。

今、この歌は全国的にヒットしていて、下手な歌手が出した歌など相手にされないくらいの人気なのである。私も毎日のようにラジオで聞いているので、耳にこびりついていて節だけは覚えている。それにつられたわけではないけど、その音がするとところに自然と体が行ってしまう。

その名は「だんご三兄弟」という。タンゴ調のこの曲は気にしなくても耳に入ってしまった、他のことに身が入らない。私に限らず、こんな経験はあるだろう。結局、私も「楠君への土産」と称し、洒落っ気も含めてこの曲が流れている売り場で団子を買ってしまい、我ながらミーハーだなと思った。そうこうしているうちに、発車時間が迫ってきたので、ホームに向かった。

9時40分頃、ホームに上がる。既に20~30人の人が列車の入線を待っている。老若男女さまざまだ。ほとんどの人が「おひなまつり」を見に行くだろう。日田の古い町並みにある商家を中心として、玄関先に雛人形を飾って、道行く人に見てもらおうものらしい。女性

には楽しそうな祭りだと思う。でも、こういう郷土色の濃い祭りには一度は行きたいものだ。

さて、いよいよ列車が入線してきた。急行型気動車キハ58系の2両編成だ。

国鉄からJRに変わってから、車両の塗装も変わり、それまでの全国一律の画一的なものから各社独自のカラーとなり、賑やかになったけど、中にはセンスを疑うものもあり、つい懐古主義で「国鉄のときのほうがよかった」となってしまう。でも、この列車にはクリーム地に薄い茶色やオレンジの帯の車両や白地に青の帯の車両で、落ち着きがあって好感が持てる。

時間が来て、いよいよ発車だ。目黒君が言うとおりのディーゼルカーは久しぶりで、気動車特有の泥臭さ、唸るようなディーゼルエンジンの音、油のにおい、全体の重厚な雰囲気は、電車とは違った深い味わいがある。客車がほとんど見られなくなった今、大切にしたい車両だ。

列車は鹿児島本線を気持ちよく走っている。このような臨時列車でも走らないと、電化されたこの線で気動車など滅多にお目にかかれない。

「沿線風景や全然覚えてない」

「そやの。俺も随分来てないし」

「俺は4年前や。目黒君はどのくらい来てないんな」

「俺もそれに近いもんがある」

行き違うのはもちろん電車ばかりで、それでも車両は様々なので、見ていて飽きない。

停車駅は快速電車と同じで、時間が少し遅いくらいで鳥栖に着いた。

鳥栖駅は4年前に訪れたときと比べても大きな変化はない。やはり側線ばかりで列車はほとんど停まっていない。それでも、かつての駅の雰囲気までは失っていなかった。それが救いであった。鳥栖には降りたことはないけど、「とす」と大書きされた駅本屋の改札のところにある駅名標など、年代もので重みを感じる。

その鳥栖を出て久留米に着くと、ここから久大本線だ。久大本線は、学生時代の9年前に初めて乗って以来ご無沙汰しているので、その頃の記憶はほとんど残っていない。だから、どのように変わったとか、印象がどうかというのとは比較のしようがない。ただ、久しぶりに乗るといふことで、初めて乗ったときのような期待感は大きい。上りの特急「ゆふ2号」博多行きが見える。



鹿児島本線と分かれて、電化されていない単線に入ると、いかにもローカル線という風景になる。また、列車も駅に差し掛かる度に極端に徐行運転になるので、とても快速とは思えないところもローカル線らしい。

沿線は桜がちらほら咲いている。3月末なので、まだ満開には程遠いけど、ようやく

春が来るんだなという実感が湧いてくる。

「まだまだ、満開とはいかんの」

ぬく
「まだ温ないけんの」

「斉さんとこの会社は花見とかあるん？」

「昔はあったかも知れんけど、俺が入ってからはやってないな。嫌われとんかいの」

「ふーん」

「どしたん？」

「いや、別に」

たぬしまる

田主丸と次の筑後吉井で続けて停車する。筑後吉井では上り普通列車の待ち合わせのため、約15分停車する。車両の中でじっとしていても仕方がないので、改札を出る。

駅前の雰囲気は、なんとなく岡山の新見に似ている。駅前にタクシー乗り場があって、正面にはまっすぐ道が伸びていて、その先には商店が並んでいる。

「新見みたいなの」

「ホンマや」

「鯖寿司でも売んりよるかいの」

「あたりして」

以前、新見を訪れたとき、鯖の腹を裂いて、内臓を抜いたところに酢飯を入れた寿司が売られていて、それが実にうまかった。新見と言えば鯖寿司、という関係が私たちの中にできている。

「お、丸ポストや」

「今日び、なかなかないぞ」

久しぶりにローカル線に乗ると、貴重なものにいろいろ出会えて楽しい。

待合室に入ると、「おひなまつり」のパンフレットが置いてあったので、持って帰る。駅

周辺の地図に雛人形を飾ってある家々の紹介がある。列車名は「日田おひなまつり号」となっているけど、他の駅でも催されているのだ。ここでも土産を買う。土地の銘菓と地酒にした。車両に戻る頃には列車がやってきた。

筑後吉井を出て、先程の田主丸と並んで梨で有名なうきはに停まる。そろそろ夜明も近いけど、どうも久大本線という山の中のイメージがあったのに、結局ずっと筑後平野を走って11時43分、夜明に着いた。ここで降りる。山が迫ってきたからというわけではないけど、この駅舎はどことなく山小屋のように見える。



いない悠然とした中にある夜明駅が今、私たちの目の前にある。

「変わってないの」

「それがええやん」

カーテンを閉めた切符売り場の傍らに、ノートが5、6冊置いてある。

「へえ、旅のノートがあるぞ」

「ここにもあるんやな。意外や」

ファンの間で有名な駅には決まってこういうノートが置いてある。鉄道ファンの誰かがここへ来た際にして置いて行くのだろうか、それとも地元の人が備え付けているのだろうか。それは分からないけど、あいにく私たちはこういうものにもあまり興味を示さない。ただ、気のなるのはノートが書き尽くされた後、次のノートは誰がどうやって用意しているのだろうかということくらいだ。最後に書いた人が新しいノートを届けに来るとも思えないが、一体どうしているのだろうか。

さっそく、2人で眼下を走る国道386号へ下りてみる。久留米方面に抜ける幹線道路なので、この辺りの国道としては交通量は多いようだ。でも、駅前の横断歩道は見通しの利かないカーブにあるので、運転していると怖いだらうなと思う。その横を筑後川が広い川幅を横たえてゆったりと流れている。

目黒君がデジタルカメラを取り出して、駅周辺の風景を撮り始める。駅舎、ホーム、道路標識、筑後川、いろいろなものにレンズを向ける。この後、楠君の家に行ったときに見ようと言う。私は前回に続いてカメラを持ってきていない。

横断歩道を渡って、切符売り場も兼ねている雑貨店に入る。ここで昼食代わりのお菓子を買う。前回もこの店でお菓子か何か買ったような気がする。

わずか20分くらいの時間だったけど、のんびりできた。そろそろ列車が来るので、駅に戻って到着を待つ。



12時04分、日田発の普通列車がエンジンを振るわせながらやってきた。私たちを乗せるとすぐに発車する。

列車は大きく右にカーブを切って、すぐに久大本線と分かれて山の中に分け入る。

この列車は日田発の日豊本線城野行き普通列車である。城野とは今乗っている日田彦山線の始発駅ではあるけど、あまり目立たない駅だ。それより日田彦山線自体がもう目立たない線になってしまった。

日田彦山線は城野と夜明を結ぶ68.7キロのローカル線である。もともとは沿線で産出される石炭や石灰石の輸送が大きな使命であった。また、線名にもなっている久大本線の日田は江戸時代には天領であった。さらにその先には湯布院があることから、かつては急行が5系統も運転されていた。しかし、今は往時を偲ぶべくもない寂しい線になってしまった。そんな中を2時間に1本程度の割合で小倉と日田の間をディーゼルカーが往復している。

ほうしゅやま

夜明から宝珠山までのわずか4駅で大分県に別れを告げて、列車は勾配を辛そうに登っている。大分最後の駅である宝珠山は福岡県と大分県のちょうど県境にある。

だいぎょうじ

次の大行司で、かつての急行群唯一の生き残りである快速「日田」天ヶ瀬行きと行き違いをする。桜がちらほら咲いているけど、ずいぶん高い地点にあり、満開まではまだ時間がかかりそうだ。

ひこさん

この辺りは日田彦山線のハイライトのようなところである。次の筑前岩屋は英彦山の登山口で、ロッジを思わせる駅舎が建っており、構内も広い。

そして、長い釈迦ヶ岳トンネルでサミットを越えて、彦山に着いた。右手には英彦山が迫っているところにあるにも関わらず、線名の一部になっている駅らしく、ここも広い。筑前岩屋と違って重厚な駅舎だ。この3駅とその沿線風景だけでも日田彦山線が満喫できそうである。

「のお、目黒君、この辺の駅って山の上の割に結構広ないか」

「なんか観光客を意識したような造りや」

「そやの」

サミットを越したとはいっても、列車は依然として山肌を窮屈そうにクネクネと走っている。それでも下り勾配なので、夜明方面へ向かう下り列車よりはましのようだ。エンジンを切って惰性で走っている。

豊前栴田でもわずかな桜を愛でると、これから先は炭鉱の顔になる。12時50分、添田着。

ここで8分停車して、下り列車を待つ。かつては添田線との分岐駅で、石炭車が数珠繋ぎに連結されていたであろう広い構内は枯草が伸びていて鬱蒼としている。ホームの造りが大きく有効長も長い。それがかえって身を持って余しているようで、早春の肌寒さのように寂しい。そこへ下り日田行きの列車が入ってくる。春休みの昼間だから、遊びに行くのか部活なのか中高生や病院帰りのお年寄りなどで駅が活気に満ちてきて、明るくなった。

12時58分、発車。この辺の炭鉱は筑豊炭田の東端に位置する。どの駅も規模も造りもよく似ているせいか、この辺ではこまめに停車している。

だんだん開けてきて、ボタ山が点在してくる。炭鉱のある町の象徴的存在だ。炭鉱の繁栄も没落もこのボタ山とともにある。しかし、石炭を没落に追い込んだ石油もだんだん石炭の運命を歩みつつある。因果は巡るということか。でも、添田駅でのあの活況を見ると、そう暗くなることもなかろう。

池尻に着く。

「懐かしいの」

「こんな駅やったっけ」

「もっと狭い印象があったんやけど」

この駅は9年前の九州旅行を思い出す。私たちと楠君の3人で行ったこの旅は少し変わっていて、楠君はバイクで、私たちはJRで回っていた。JR組の私たちはその頃全国のJR線の完乗を目指していて、このときは九州をすべて乗ることにしていた。ただ、漫然と乗るだけでは面白くないので、楠君が、

「何ヶ所か集合する駅を決めて、そこに指定の日時にみんなが集まることにせんか？で、もちろんそのとき以外は3人とも別行動や」

という提案をしてきた。

「ほう、なかなか面白そうやん」

たしかに十日くらいずっと同じメンバーで旅をしてもいづれ飽きが出る。それに一緒に行動すること自体がお互いを拘束することになる。そこで出されたのが、この提案である。これだと、指定された日時に指定駅に行くこと以外は三者三様の旅ができるわけだ

また、数日毎に会うので、お互い新鮮で、行程に変化を付けることができる。画期的な旅ではあるけど、こういうことは学生のとくにしかできない贅沢な旅だと思う。

そういうユニークな形の旅で、選ばれた駅の中に、先程の夜明とこの池尻があった。しかし、夜明と池尻では同じ9年ぶりの印象にこうも開きがある。

田川後藤寺、田川伊田といったJRや平成筑豊鉄道の分岐駅では乗客の入れ替わりが激しく、なかなか賑やかだ。後藤寺まで来ると列車の本数も多くなる。小倉へ出るのも1時間くらいだから、買い物などで出かける人も多いのだろう。

今日はなかなか来なかった睡魔がついに襲ってきた。目の前の目黒君も同じようだ。目黒君の場合、一度眠り出すと簡単には起きないから厄介だ。大体30分から1時間は眠りに就く。それを見ていると、私もつられて眠たくなる。

「おいこら、寝るな」

「ええやん」

「いかん、俺が眠たなる」

「寝たらええが」

「またそんな勝手なことを」

とうとう私も眠ってしまい、気が付くと志井公園とか石田といった辺りを走っている。城野はもうすぐだ。

「どこ？」

と目黒君が細い目を開ける。

「もう、着くで」

「うわ、知らん間によっけ乗っとる」

「ほんまやの。俺も何駅か寝てしもたけん、分からんかった」

しばらくすると、右手から見えてきた複線の日豊本線のレールに合流して13時56分、城野着。

すぐに接続する13時59分発小倉行きの普通電車に乗って、わずか3駅の14時08分に小倉に着き、ここで「かしわめし」を買う。すぐ近くの折尾のものが有名だけど、それと同じものかどうかは分からない。

またも好接続で14時16分発の門司港行きに乗って、14時22分に門司に着いた。急にめまぐるしい接続になった。

ここで、目黒君推奨の2軒目のラーメン屋へ行く。その店へは目黒君は一度行っていて、うまかったと言う。目黒君のお墨付きがあるのなら、まず間違いないだろう。

「ここはの、3時にならんと開かんのや」

「ラーメン屋にしては中途半端やな」

「でも、早い人は1時間も前から店の前で待っとる」

「ふーん。よっぼどうまいんやの」

「まあ、行ってみよう」

門司の街を歩くのも久しぶりだ。でも、そのときは上り「ムーンライト九州」の長い停車時間を利用して、夜食や酒類の調達のために近くのコンビニエンスストアへ行っただけで、散策というほどでもない。それに夜のことで、どこに何があるといったことは何も分からない。

「たしか、これで合うとったと思うんやけど」

「どしたんな。迷たんな」

「いや、この辺なんは間違いない」

目黒君も私も頭の中の地図がときどき機能しないことがある。それでも、すぐ思い出したようで、

「1本行き過ぎとった」

と、あまり広くない道を抜けると、昔の街道のようなところに出た。すると、それらしい店構えが見えてきた。

「あれや」

目黒君が確信を持ってそちらへ向かい、店の前まで来る。この店もいかにも、という店構えで、期待させてくれる。屋号は「珉子^{みんず}」という。



駅前の太い通りを1本外しただけでこんなにのどかなものかと思うくらいのんびりしている。自転車に乗って遊んでいる子供たちや井戸端会議に興ずるおばさんたちがいる。そして、「珉子」の前には常連らしい人、家族で来た人、私たちのように遠路はるばる訪れた人などなど、みんながこののどかな空間を共有している。

3時前、店の主人らしいいかつい印象のおじさんが出てきた。早く開けるのかと思ったら、すぐに店に戻っていった。

こういう店の主人というのは職人肌で、何人たりとも侵すことのできない独自の世

界を持っている。自分に気に入らないことがあれば、ときには客をも叱ったりする。要するに客に対して厳しいのだ。それでも主人は平気である。「俺のやり方が気に入らないのなら、食べてもらわなくても結構」という考えなのである。しかし、それでもやっぱり美味しいから、客はついてくる。さぬきうどんもそうだが、今のサービス全盛のこのご時世でも、こういう店は客のほうに合わせなくてはならない。

とは言うものの、私はこの主人の第一印象でそうだと勝手に思っているだけのことであって、実際どうなのかは分からない。

結局3時過ぎに店が開いて、たまりかねた私たちはなだれ込むように店に入っていったもつとも、私たちは最初のカウンターには着けず、2番手以降になった。店の構造は今朝方行った「一蘭」と同じような形で、違いはカウンターの脇にテーブルがないところくらいだ。すべてカウンターだと、客の回転も早いから、大勢の人が来ても、すぐさばける。私たちもすぐに座ることができた。

こういう客に厳しい店で感心するのは、けっして待っている客の順番を間違えないところだ。割り込んだりしようものなら、店の人から注意を受ける。ぶっきらぼうだが、温かさがある。また、自分に厳しくもある。

さて、いよいよ本日2杯目のラーメンである。もちろんスープは豚骨で、麺は固めである。2人とも無言のまま、10分足らずで食べ終えた。スープもほとんど飲んで、店を後にした。

「こんなもんなん？」

「うーん、もつとうまかったと思うんやけど」

「そやろ、『一蘭』と比べたら、スープがの」

驚くほど美味しいわけでもなく、ごくごく普通の味だったのである。麺は腰があってしっかりしていた。

これは豚骨ラーメンの宿命のようなもので、その日によって味に違いが出るのだ。同じ店でも、この世にこんなスープがあるのかという味に出会ったかと思うと、後日行ってみると、こんなものだったか、となることもある。これは舌がスープを美化したわけではない。醤油ラーメンや味噌ラーメンにはあまり見られない好不調の波が豚骨ラーメンの場合如実に現れるのだ。だから、一度行っただけでは評価が下しにくい。でも、目黒君が「うまい」と言うくらいの店なので、美味しいに違いない。今日はたまたまめぐり合わせが悪かっただけだ。そうであれば、また来れば済むだけの話だ。



気を取り直して、駅に戻る。正面から見た門司駅は鹿児島本線の起点の駅である門司港にも引けを取らない立派な石造りの建物で、さすが九州の玄関にふさわしい駅舎だと感心する。

既に予定していた列車は出た後で、少し時間がある。駅前では古本の展示をされていて、目黒君はそのコーナーに釘付けになる。目黒君は古本には目がない。私も手持ち無沙汰なのでのぞいてみたものの、結局、私は何も買わず、目黒君は何か買ったか買わなかったかゆくはし覚えていないけど、15分くらいで改札に戻ってホームへ上がる。間もなく、行橋始発の15時39分発の下関行きが入ってきた。

発車してすぐ関門トンネルにもぐって、6分で終点の下関に着いた。ここで最後の土産を買う。下関といえば、定番の駅弁「ふくめし」だ。これでひと通りの土産を買った。駅弁3つに地酒なので、後はビールなどを下松で補充するくらいだ。

「これだけあったら、十分やろ」

「楠君、泣いて喜ぶぞ」



自賛するほどでもないけど、3人で会うのは2年ぶりなので、再会の準備にも余念がない。郷土色豊かな土産と突然押しかけて驚かすのと九州の土産話と、これで舞台装置は整った。

下関のホームに立って辺りを見渡す。2年半前に、廃止前の急行「さんべ」に乗りに来て以来、久しぶりに下関を訪れたのだけど、鷹揚とした雰囲気は変わっておらず、いくつもあるホームはどこも賑やかだ。電車やディーゼルカーが入り混じり、また発着も多いので、見ていて面白い。

「花よりダンゴ」の続きを読む